

# シトー修道会と都市

## — 12 世紀後半から 13 世紀末 —

クヌート・シュルツ  
魚住昌良・早川朝子訳

11 世紀末葉に成立したシトー修道会 — 1070 年にモレーム、1098 年に修道会そのものが創設された — は、初期のキリスト教的な生活形態と、修道院の精神的理想基盤に立ち返るといふ衝動にかられたものであった。それは結局のところキリストに倣うこと (*imitatio Christi*) を意味した。つまり、一方でキリストの禁欲的な生き方に直接倣いつつ、他方で「祈り働け」 (*ora et labora*)、即ち献身的な祈りと徹底的な労働を基本原則とするベネディクト会の会則を妥協なく解釈し適用することであった。修道士・聖職者改革を望む精神に満ち溢れ、また巡回説教師や清貧運動が積極的に求められた時代にあつて、このような、どちらかという目立たないところで根底からキリスト教的・修道院的であろうとする努力が即座に人目を引いたのは、そのような努力が、叙任権闘争期の改革派教皇権によって決着づけられた、この世における教会の優位をめぐる闘いとは対照的で相容れないものであったからである。更にはシトー修道会自体の出身母体であり、そのときはクリュニー修道会という形をとっていたベネディクト修道会との争いが避けられなくなっていた。それどころか意識的に望まれたのであった。というのも、かつて改革をその責務としていながら、今や多くの世俗的關係に絡まれ政治的大勢力となったクリュニー修道会は、モレームのロベルトゥス、アルベリクス、ステファヌス・ハルディングのまわりに集まった禁欲的修道士たちで構成する新しい共同体の批判的な目には、決して神の恩寵を見出すものではなかった。そこに見出されるのは、せいぜい永劫の罰に対する警告であった。従順、貞潔、清貧という修道士の誓いには、シトー修道会の場合、土地領主制的な教会収入の拒否、つまり肯定的に言い換えると、自らの労働による自給自足の原則が結びついていた。そもそもはじめから、そして常にその特色であり続けたのは隠遁 (*Eremos*)、即ち人間のせかせかした営みや虚栄心から離れた孤独であり、その定住地や生活様式もそのように特徴づけられていた。

ついでに言うと、日本人もそうであるように、自然美を見る目をもつ者が、建築様式上非常に心ひかれるシトー派修道院を訪れると、今日においても大抵の場合、難なく「愛らしい渓谷沿い」の魅力ある景観にはまりこむその修道院を賛美できるであろう。

これらすべてのことは一体、シトー修道会の都市に対する関係とどう関わるのか — そのようにあなた方がもどかしくなって質問するのももっともである。さしあたり何の関係もな

い、という結論を導き出すことは全く正しいと言えるであろう。もっとも、この初期の「神の戦士」たちが都市から離れ都市とは無縁であったということ、このことは、自身の余剰生産物を近隣の市場で販売することが大目に見られていたという点で、基本方針に則してみた場合、はじめから穴だらけであった。しかしその他の点では、市場や都市への距離が、「愛の憲章」(“*Charta caritatis*”) 及び修道会総会の初期の決議にあるような意味で守られてきた。都市に対する関係を、はじめはゆっくりと次いで急速に変化させることとなったその過程をここで辿ることはできないにしても、その経過にとって若干の重要な局面を挙げることはできるであろう。他のほとんどの宗教や文化でもみられるように、シトー修道会の場合も、他ならぬ模範的・禁欲的で清貧を義務とするような生活様式が結果として富裕に帰着してしまうのであり、しかもそれはこれらの修道士たちに寄せられた称賛、感嘆、敬意の故にであったという観察が当てはまる。二つ目の、全く別の性質の現象を、クレルヴォーのベルナルドゥスという卓越した人物が描き出している。ベルナルドゥスは、多くの歴史叙述によると、12世紀にその存在を強く印象付けた人物であった。クレルヴォーのベルナルドゥスは、確かにシトー修道会会則の基礎を離れることはなかったが、一方ではしかし、その強力な教会政治活動を通して、修道会を世俗的諸関係の中に無理矢理引き込んだのであった。また他方では、その傑出した個性を通して、法外に強力な膨張を引き起こしたのであり、シトー修道会の入植に際して、聖俗諸侯の領邦政治的利害関心が生じるほどとなった。最後に、そしてとりわけ、12世紀の経過の中でヨーロッパの姿を変えてしまった爆発的な都市化の過程が、すでにシトー修道会にも影響を及ぼしていた。というのも、修道士や助修士の多くが市民層の出身であり、修道会に都市の財産をもたらしたからである。都市への新たな結びつきのため、必然的に付け加わることになったのは、経済的成功という精神に則して思考し努力するという心性の変化であった。前面に立ったのはもはや清貧の理想ではなかった。それは依然として個々の修道会員には当てはまっても、制度としての修道会には当てはまらなかった。

シトー修道会の経済政策と経済感覚のこのような変遷過程について、その時期を決定し具体的叙述を可能にする個々の徴候や要因は、確かに 1970 年代になってようやく — フリードリヒ・マイネッケ研究所の重点研究目標のひとつとして始まった — 比較的是っきりとした形で、あるいは部分的には全く新しく視野に入ってきたのであるが、その間あまりにも多くの考察や研究成果が生み出されたのであり、以下の概観では適宜選択していかざるを得ない。

労働についての、即ち、マルタとマリアという一対の女性で描かれる、活動的な生き方 (*vita activa*) に対する瞑想的な生き方 (*vita contemplativa*) の関係についての心構えが根本的に変わってきたのであり、それはつまり、労働との比較における祈り・黙想・閑暇についての評価が、人間の精神的・肉体的二面性に対応して変化したのである。このことはすでにクレルヴォーのベルナルドゥスが、その基本となる著『アポロギア』(1124年)の中で、また同時期にプレモンテ修道会の大修道院長ハーヴェルベルクのアンセルムも表明していた。こ

のような理解において労働とは、ただ単に必要悪というだけでなく、それ自体固有の高い評価をもつ。それは「個々人の魂の救済にも社会的・慈善的責任にも」奉仕する（Kurze, 184頁）からである。この—— そう言いたいならば—— 新しい労働エートスは、とりわけ禁欲と結びついた形で、確かにシトー修道会の経済的成果に少なからず貢献した。この改革派修道会の労働に対する心構えの変化とその生産性が、それのみが、あるいはそれもが、新たに形成されつつあった市民世界を、ヨーロッパの尺度においてどの程度反映するのかについては、当面そのままにしておこう。いずれにせよ労働は、この覚醒と変革の時代以来新たな評価を受けることになった。

## 1 シトー修道会<sup>シュタットホーフ</sup>の都市居館

シトー修道会の修道院的・精神的理想や修道会規則に即して言えば、工業・手工業の領域においても十分な自給自足が達成されなくてはならなかった。それでもやはり、市場での営みや商品交換との関わりが完全に否定されることはなかった。1152年より前に成立した修道会総会の公式の議決規定集の中ですでにみられる、市場を頻繁に訪れることの危険性に対する警告の数々は、このことがすでに日常的に行われていたことを窺わせる。

すでに1157年には修道会総会において、「我々の商人たち」のせいで多くのもめごとや混乱が生じているという問題が話し合われている。そして事実、経済的任務を負った独自の都市居館設立に関する、文書として最も古い証拠が早くも12世紀の40年代初めに出ている。それは1142年の文書で、それより少しばかり前に創設された中部フランケンの修道院エブラッハとハイルスブルクの、ヴェルツブルクにおける居住地に関するものであった。おそらくヒンメロート修道院—— 大規模なブドウ畑所領をもち、後にアイフェル山地の大きなシトー修道院となる—— は、すでに1134年に、トリーアに証明される土地付き家屋を建てていた。

ケルンについては、ゲルト・シュタインヴァッシャーによるシトー修道会の都市居館についてのすぐれた特殊研究があるが、そこではシトー修道会の合わせて16の修道院が、それぞれ固有に使用できる居館や家屋を所有していた。8つの女子修道院と1つの分院をとりあえず度外視すると、ケルンで持続的に居を構えていたのは7つのシトー修道院（男子修道院）のみである。まず最初に1150年から1160年代初期までの間に、最も重要な、即ちベルク地方のアルテンベルクとラインガウのエーベルバッハ、それに1182年のヒンメロートが続いた。13世紀前半にはカムプ、ハイステルバッハ、マリエンシュタットも、重要な居住地をこのラインの中心地に獲得した。ヴェルツブルクの状況は、ヴィンフリート・シヒヒが明らかにしたように、全く類似しているようにみえた。すでに言及したエブラッハとハイルスブルクの修道院の他に、他のフランケンのシトー修道院、ブロンバッハ、ラングハイム、シェーナウ、シェンタール、ビルトハウゼンも同様に都市居館を設立し、ハルツ地方のヴァルケンリートのものも確認された。更に4つのシトー会女子修道院が加わった。同様に興味深い

のは、逆方向から、つまり個々の修道院を起点に作成されたリストである。そのようにみると、すでに言及したヒンメロート修道院は中世後期に、トリーア、コブレンツ、アンデルナハ、ボン、ケルン、シュパイアー、エヒテルナハ、ヴィトリヒ、ラインバッハ、ツェルの都市居館を意のままに使用した。プファルツのオッテルベルク修道院はカイザースラウテルン、ヴォルムス、シュパイアー、マインツ、オッペンハイム、ビンゲンにその存在が認められた。この都市居館の分布図が、都市の視点からも修道院の経済網という視点からも、都市地域全体の経済的発展にとっての修道院の意義を、また特にその機能についての補足説明を求めた場合に、ありありと目に見えるように描き出すことは想像に難くないであろう。個々の居住地での任務の優先順位との関係で、何に重点をおくかは各修道院によって様々に異なっていたとしても、ほとんどの都市居館は、まず第一に修道院の生産物の商品販売に従事した。倉庫としての利用、即ち商品の貯蔵も可能であり、このようなやり方で商品を、季節や価格形成を考慮しながら利益が上がるよう売却しようとしたのである。

その際中心となったのは疑いもなく農業生産物であり、まず第一にワイン、次いで穀物や動物製品（羊毛、獣肉、皮革ないし皮革製品）も増加しつつあった。最も利益を上げたのは、ワインをその場で飲むために販売した、都市居館での自営のワイン酒場（ad brocam）であった。都市居館と近隣のグランギア（修道院附属農場）との直接取引は、部分的に非常に有益であることがわかった。この種の組み合わせは、すでに言及したヴェルツブルクの場合を別として、ヘッセンのハイナ修道院について証明された。フランクフルトの都市居館にはベルゲンのグランギア、ゲルンハウゼンにはロート、フリッツラーにはシングリス、トライザルにはランスバッハ。このようにみると当時の地域的な組織網が浮かび上がる。

おそらく当初から都市居館は、宿泊所や拠点としての第三の重要な機能をもっていた。一方では修道会員自身のため、即ち修道会の事務で旅行している会員たちや集会のためであり、他方では親交のある領主、諸侯、王ないしその従者たちを宿泊させるためであった。シュタウフェル朝の書記局からだけでも、たいへんな数の特権がシトー修道会の居館に与えられていて、そういった資料をわれわれは手にすることができる。その特権とは、シュタウフェル側からの、またその使節たちのための、<sup>ガストゥンクスエアヴァルトゥンク</sup>無償接待義務の免除ないし制限を言い渡したものであった。シトー修道会が拡張していくにつれて、この宿泊機能は弱まるよりはむしろ強化された。とりわけそれと密接に結びついていたのは都市居館の管理・経済機能であり、初期の頃は大抵の場合専門知識をもった一人の助修士、つまり平修士が、13世紀末以降はしばしば一人の修道士がそれを指揮していた。ここではこれ以上広いスペクトルを示すことはできないが、以上との関連で、まず第一に都市にあるシトー修道院のいずれもがもっていた大規模な家屋・土地財産を示しておく。アルテンベルクの場合に限ってみても、14世紀中葉のケルンにおいて100箇所を超える家屋ないし地所を含んでいた。それに都市周辺地域の資産が加わり、それらにとっても同様に、都市居館が徴税所であり組織の中心であった。ここで対応する数々の協定が結ばれ、進歩的で模範的とみなされた帳簿や記録簿が導入された。

最後にもうひとつ別の点として、都市居館が避難場所として言及されたならば、この要素もまた前面に押し出されてよく、当初から重要な役割を果たしている。とりわけ中世後期や近世になって、人里離れたところにあるシトー修道院に対する危険が増大するなかで、その要素はますます強く現れた。商品を比較的安全な都市に貯蔵するためだけでなく、非常時には修道院の構成員たちが一時的に宿泊しよりよい時期がくるのを待つための場所でもあった。ここにただ総括的にリストアップしたこれらの諸機能は、ある程度まで、都市居館の位置や形態に反映している。都市居館には、市壁に接する周縁地域が確かに好まれたが、都市の幹線道路や市門に出やすいことも必要であり、また一部には河港につながっているところもあった。簡素ではあるが地下貯蔵庫の丸天井を備え付けた家屋が、頻繁に、いくばくもしないうちに、保塁、中庭、周囲をとりまく建造物を伴った堂々たる都市居館となった。なかには独自の礼拝堂をもち、立派な部屋を誇示しているものもあった。

## 2 商業活動、関税特権、航行

シトー修道会の都市経済への関わりは、決して局地的・地域的な市場取引に限られるものではない。たとえこの要素がこれまで比較的強く——専らそれだけということはないが——視野に入ってきていたとしても、ケルン周辺のカムプ、アルテンベルク、ハイステルバッハのようなライン地方の大きなシトー修道院は、また特にラインガウのエーベルバッハ、モーゼル近郊南アイフェルのヒンメルロート、エルザスのノイブルクは、例外なくすでに12世紀後半には、広く張り巡らされたひとつの商業取引網を結び始めていた。主として最後に挙げた三つのシトー修道院に限ってみると、このようなことが行われたのは、一方ではある共通性、即ち、おそらく三つのドイツ最良のワイン地域を起点とする広域のワイン取引の故であり、他方では商取引政策に関する相違の故であった。

南部のノイブルクからはじめよう。そこは、シュタウフェルの「お気に入りの城館」であるエルザスのハーゲナウと提携したシトー修道院であり、1195年に皇帝ハインリヒ6世よりワイン取引に対する関税免除特権を獲得した。この特権はどちらかと言えば地域的な特色をもつものであり、確固たる権原に基づくというよりは、要求を並べ立てたものであった。ライン地域のこのような商取引諸特権が実際に確立・強化されたのはしかしながら、ようやくフリードリヒ2世によってであり、1222年以降のことであった。確かにノイブルクが優位にあったが、最終的にはシュタウフェルと親密で同方向の意図をもったエルザスのすべてのシトー派修道院、即ちパイリスとケーニヒスブリュックにとっても有利なものとなった。その意図とは、自家製のワインを積んだ修道院の船を、年一回免税でライン川をケルンまで下らせ、同様に、鯀、塩、バターといった修道院が必要とする生産物を積んで帰航させることであった。一見これはささやかな願い事のように思われる。しかし、皇位継承戦争（1198年-1214年）以来ドイツの国王・皇帝たちはライン関税自体をほとんど自由に処理することができなかったこと、ライン関税はしかしながら何度かの中断はあったが常に増加していた

ことを考慮するならば、個々の修道院のために皇帝が自らの願望や意志を実行に移したことは、すでにひとつの大きな経済政策上の措置であった。最後にはしかし、ノイブルクの修道士たちが巧みな外交手腕、贈与や寄付の他に、ライン地方の諸侯の家族を修道院の記念祈祷仲間に入れることを通して、確かにすべてではないが、比較的重要なライン関税領主たちを、修道院の船が年一回免税でラインを下りまた遡航することを承認するよう動かしたのであった。そこからの利益は莫大であったに違いない。修道院の船の積載量は抜け目ない修道士たちによって、時とともに、ワインや穀物が 150 フーデル、およそ 150000 リットルまで引き上げられ、最終的に積荷は二、三艘の船に配分されなくてはならなかった。ケルンでの取引に供されたエルザス産ワインの大部分は、修道院の船で、一部は無税でケルンのワイン倉庫へ運ばれたのであった。

ヒンメロート修道院は更に遠方へ目標を定め、トリーアからコブレンツまでのモーゼル川全区間とケルンまでのライン川、それに加えてライン川上流のシュパイアー近郊にある自己のグランギアやノイホーフエン／メッテンハイムまでの区間に都市居館の形でいくつかの拠点を築いた。12 世紀から 13 世紀への変り目以降数多くの関税特権が獲得されていったが、それらは他の多くの事例のように目的地ケルンで終わるのではなく、それを越えようとしていたことがはっきり認められる。そのひとつはケルヴリエト — 北海へ注ぐライン河口 —、いまひとつはアントヴェルペン — シェルデ川を越えてブラバントやフランドル（例えばガン）へ通じるシェルデ河口地域 — である。トリーアからフランドルに至るこの区間においてヒンメロートは、特権的航行活動を維持し、それは間違いなく、エルザスの姉妹シトー修道院のそれよりはるかに大規模であった。ヒンメロートの娘修道院ハイステルバッハは、この模範に倣ってライン河口地域のドルトレヒトに商取引拠点を設立し、そこへ中部ラインで自ら生産したワイン並びに穀物も輸送した。近くにあったイングランドへ向かう水路は、明らかに、ヒンメロート修道院自らがその全流域を航行したのではなかった。しかしフランドルから先は、イングランドやフランドルの修道院を通して容易に中継され、ヒンメロートの良質のモーゼル・ワインはこのような経路でイングランドに達していたと考えてよいであろう。このような区間分割については、それを認識させる根拠もある。それはつまり、修道会総会の規定が、他の修道院の長期商用旅行を阻止するため、水路近くのシトー修道院だけがイングランドの海 (*mare anglicum*) (=ドーヴァー海峡) を渡るべしと定めていたことである。いずれにせよヒンメロート修道院の商取引活動は、他ならぬケルンにおいて、商人たちの間で若干の批判的注意を喚起していた。カエサリウス・ハイステルバッハの奇跡物語に反映されている通りであるが、残念ながら時間的制約からそれに立ち入ることはできない。

### 3 都市指導層との個人的・政治的絡み合い

奇跡物語の代わりに、さっそく、おそらく最も徹底した商業政策をとったエーベルバッハ修道院に話を移すことにする。このラインガウのシトー修道院は、すでに 12 世紀最後の三

分の一には、ライン川とその支流に、特権的な商業・通商ネットワークを構築しはじめていた。おそらく唯一その修道院だけが、数多くのラインの関税徴税所に対して、ほとんど完璧な免除を獲得することに成功していた。その際大きなワイン地下貯蔵庫を備えたケルンの都市居館が、当初から商業航行の重要な目的地であったが、時にはそれを越えていくこともあった。中世後期においてもエーベルバッハは、ワインの当たり年には最良のワイン 4000ヘクトリットルを、ラインガウ最高の生産地からケルンへもたらし、依然として最大の個人供給者であった。その拠点組織はしかし、ケルン、マインツ、ビンゲンの司教区庁だけでなく、フランクフルト・アム・マイン、ヴォルムス、オッペンハイム、ボッパルト、ラーン沿岸のリンブルクの居館をも包括していた。エーベルバッハは、他の多くのシトー修道院とは異なり、聖界修道院一般に共通する修道院特権や優先権、即ちイムニテート、免除特権、市場の権利 (ius fori) — つまりその時々<sup>エクゼムツィオン</sup>の修道院の生産物や消費財に対する免税 — といった諸原則を引き合いに出すのではなく、場合によってはシトー修道会総会の決議に反してでも、自身にとって大事な諸都市と交渉し、これまで与えられてきた様々な経済的利益のお返しとして、契約による義務を負うことも引き受けたのである。ケルンでは、1212年にエーベルバッハが、市場地域の小教区聖ブリギテン内の一地所を譲渡されたことの引替えに、12人の貧民に毎年衣服を支給する義務を引き受けた。このことはケルン市庁舎における市民総会で、市民法の諸規定に則して市民憲章 (carta civium) の形で合意されたのであった。ヴォルムスにおいてエーベルバッハは、1213年に中心部にある居館を市民の手から獲得しながら、市民の特権・義務の仲間入りをしたことにより、市の関税・税金免除を享受するに至った。このことは要するに、市民権の獲得と言い表すこともできるであろう。オッペンハイムでは、エーベルバッハが1229年に、市壁の重要な一部の管轄を引き受け、その代償として都市の保護・法共同体に受け入れられた。更に際立ったのは、直接隣接する大都市マインツに対する態度である。マインツは、12世紀から13世紀への変わり目に、市の自治と自己支配をめぐっての、都市領主たる大司教との闘いの中で、頼りになる強力な同盟者を得たのであった。ヒンメロート修道院とその娘修道院ハイステルバッハも、部分的には似たように振る舞い、13世紀から14世紀へ移行した頃、ラインバッハにおける地域の支配権をも獲得していた。このような市民との密接な協力関係はしばしば、抜け目なく利益をもたらすものであることが判明した。というのも、ほどなくして多くのシトー派修道院は、修道の理想という隠れ蓑のもとにただ利欲だけを隠しもち、金銭に飢えた商人たちのように振舞っているという評判に陥ったのである。このような非難は、すでにヴァルター・マーブ (1209年頃没) とその同時代人ギラルドゥス・カンブレシス (1223年没) がシトー修道会士たちに対して、このうえなく辛辣に申し立てていたのであり、ハイステルバッハのカエサリウスの奇跡物語においては、商取引相手に向けたケルン商人たち自身による意地の悪い非難が伝わってくる。ここではしかしながら、むしろ他人の不幸に対する喜びや皮肉の形で、シトー修道会の経済的優位やそこから生じる市民の商人たちに対する不公正と競争の歪みは、最終的には、そこから

何らかの衝突が惹き起こされないはずはないくらい著しいものとなった。しかし、都市市民と修道会員たちの間に個人的・家族的関係があったのかどうかということと、都市はシトー修道会において信頼できる相手をもったという印象を得ることができたのかどうかということは、全く根本的に異なっていた。シトー修道会は、確かに全体を通してその経済的利益を念頭においていたが、同時に都市の市場にとって、主要食糧品の非常に重要な供給者となっていた。このような関連で、その時々シトー修道院が協力関係にあった都市に対して推し進めた政策が、重要な役割を果たしたのである。

#### 4 帝国政策・王領地・財政

数量的な社会分析を目指した都市文書の利用は広く行われているが、ここで取り上げた、市民共同体や個々の家族のシトー派修道院に対する関わり合いという問題については、私が比較的詳細に調査したひとつの個別事例を紹介しておきたいと思う。それは即ち、ケルン出身の騎士カール・フォン・デア・ザルツガッセの素性、経歴、活動についてである。この人物については、後にブラバントのヴィレールにあるシトー派修道院の大修道院長になった時の彼自身の伝記が残存し、その他数多くの生きた証言が存在する。彼は（同名の父親）カール・フォン・デア・ザルツガッセの息子として、ケルンで最も高貴な一家系の出身であった。父親は、市参事会や参審人団体、そして間もなく支配的となったリッヘルツェへのメンバーであっただけでなく、大司教の都市税官吏でもあり、また司教座聖堂参事会のミニステリアルでもあった。更には、かつてアーヘンのシュルトハイスで帝国ミニステリアルであったリーコルフや詩作でも知られたゲルハルト・ウンマツェをはじめ、その他ケルンの指導層に属する家系と密接なつながりをもっていた。カール自身は見事な風采で、ハイステルバッハのカエサリウスが伝えているように、美男で武芸に長けた筋骨逞しい騎士という理想像そのものであった。その人を惹きつける性質の故に、どこへ行ってもよく知られ尊敬されていた。カールは、宮廷での大きな祝祭や馬上槍試合の催しに登場するような若者の一人であり、あの有名な 1184 年のマインツの宮廷会議にも姿を現し、直接ケルン大司教フィリップ・フォン・ハインスベルクの側に立った。このような騎士としての外観に、——現在のわれわれの想像力からはあまりぴんとこないが、当時を理解するうえで非常に重要である——ケルンでの学校教育と商人としての教育が加わった。この下ラインの中心都市における騎士と市民の教育は、指導層家系の息子たちにとっては、すでに 12 世紀後半には対立矛盾するものではなく、相互に関わり合い組み合わさっていた。

騎士としての挙動が最高潮に達した直後に、カールの人生に極めて大きな転機が訪れた。1184 年のマインツの宮廷会議とそれに続いて行われたヴォルムスでの馬上槍試合の後、カール・フォン・デア・ザルツガッセは回心 (*conversio*) を遂げた。この世からの離別を決意し、シトー修道会の人里離れた孤独さの中へ退いたのであった。この出来事をカールの伝記 (*Vita Karoli*) が目に見えるかのように伝えていて、決してそれを簡単に見過ごすことはできない。

そこでは次のように書かれている。「カールは、ケルンの友人で戦いの同志でもあるゲルハルト・ヴァシャルトと一緒に草原を馬で駆けぬけた。その草原とは、見事な花を一面に咲かせ、かわいらしい小川が流れ、泉が湧き出ているような場所であった。この魅力ある場所 (locus amoenus) を目の当たりにしたその時、空虚 (vanitas) の意識、現世の栄光や営みのはかなさ・むなしさの意識が彼を襲った」と。彼はトリーアから遠くないところにあり、ケルンとも経済的に密接に結びついていたヒンメロート修道院に入る決心をした。このことはしかし、ケルンにいる親戚や友人たちの間で当初は反対にあったが、やがて共感と支持が得られるようになった。その結果、ケルンの指導層出身で騎士身分にある他の多くの若者たちも、彼の例に倣ってシトー修道会に ― はじめは試験的に ― 入るようになった。このちょっとした示唆を通して、ケルンのような商業の中心地において、少なくとも一部の、政治的にもまた商人としても指導的地位にあった人々が、ラインにある大きなシトー修道院に親近感をもち近い関係にあったことが認識され証明されるであろう。そのシトー修道院の方では、ケルンの騎士的市民の加入を通して、大した苦労もなく都市へ進出することができたのである。その際、カール・フォン・デア・ザルツガッセの家族の財産がヒンメロート修道院にとって明らかに重要な役割を果たした。つまりザルツガッセ (小路) にある彼の両親の家、そこはライン河港へも直接通じるホイマルクト (市場広場) に面した中心地であり、そこにヒンメロートは、おそらく 1185 年を過ぎて間もない頃に、最初の都市居館を設立したのであった。

この頃 (1186 年?) カールは修道誓願、修道士になるための誓約を済ませたが、早くも 1189 年には小修道院長としてハイステルバッハへ招請された。そしてこの何年かの間に ― 伝記も語っているように ―、帝国政策のうえでも経済のうえでも突出した主導権を発揮した。カール・フォン・デア・ザルツガッセは、ケルンからの同行者ウルリヒ・フラスコ／フラッシュェとともに、皇帝フリードリヒ・バルバロッサとその息子で後継者のハインリヒ 6 世の援助を受けて、シュパイアー近郊の経営管理農場 (curia Spirca) を設立したのである。このことは、ヒンメロートとハイステルバッハの修道院にとって重要な経営管理農場ないしグランキア・ノイホーフェンとアフォルテルバッハを、シュパイアーにおけるシュタウフェル家の中心地のすぐ近くに建てたことになる。

もしこのような措置の前提や意味を問うならば、いくらかその政治的背景を説明しておかなくてはならない。カールが、ケルン大司教の側に立つケルンの若き騎士として、すでに個人的に皇帝に知られていたことは間違いない。皇帝は、カールとその友人で同行者のウルリヒ・フラスコを、修道会においても (in religione)、即ち彼らが回心した後も同様に愛し賞賛した (dilexit et honoravit)。同じように親密で全く友好的な関係が、若き皇帝ハインリヒ 6 世 (1190 年以降) との間にも成立した。個人的好感とともに、シュタウフェル家の支配者たちをこのケルン出身の二人の白い修道士に結びつけたものは、疑いもなく、とりわけ古典的な帝国領 (terrae imperii)、即ちライン川沿いの王領地において目覚ましい成果を上げていたシトー修道会に対する関心であり、 ― もっと具体的には ― このような大きなシトー修道

院がここで担うことになっていたような、経済的及び領域政策的任務との直接的つながりを、シュパイアーの地域に創出することであった。

政治的目的設定並びに協力は、しかしこの場合更に広範囲に及んだ。1194年5月8日から10日までトリフェルスにおいて、またアンヴァイラーで、皇帝と帝国の要人たちとの会合が行われた。それはシチリア王国を征服しドイツ人のローマ帝国に編入するため、帝国の軍隊が出発する直前のことであった。1194年11月末のパレルモ入城でもって、その企ては成功裡に終わった。有名な帝国ミニステリアルであり帝国トゥルッフゼスでもあったマルクヴァルト・フォン・アンヴァイラーが、この企ての中心的統括者として仲介したことにより、皇帝とヒンメロート修道院との間で、軍隊への財政支出のための注目すべき取引が最終的に実現したのであった。同シトー修道院は、銀貨2000マルクという巨額を貸付金として用立て、その代償として、シュパイアー近郊のグランギア・ノイホーフエン・アントリップの周辺に所有地や担保を獲得した。直接隣接していたハイステルバッハ修道院もアフォルテルバッハに、それ相応の拠点を設けた。このことはカールの伝記からだけでなく、当時ハイステルバッハの小修道院長であり、この事業の長としてのカール・フォン・デア・ザルツガッセが、金銭の代わりに供与されて得た現物の数々からも明らかとなる。

このような高額な資金をすぐにも用立てることができるには、一方で、金銭取引において非常に大きな成果を上げたシトー修道会ないしヒンメロートを通して建設された娘修道院、他方で、カール・フォン・デア・ザルツガッセのような財政の天才が背後になくはならなかった。このような活動についてその地域だけに着目するならば、別の同様に重要な側面が浮かび上がる。それは、シュタウフェルと近い関係にあるシトー修道院が、王領地 (*terrae imperii*) 形成過程に組み込まれていることである。ヒンメロートとハイステルバッハは、新たにつくられた拠点とともに、シュパイアーの市門のすぐ前に広がるライン川の平原へと押しやられ、その勃興しつつあった都市と結びつけられた。次いで南西へ僅か数キロのところでは、トリフェルス周辺の帝国で二番目に大きな拠点、アンヴァイラーが、シトー修道院オイサータールと結びついた。そこから少し北では、壮麗な新しい皇帝の居城都市カイザースラウテルンとシトー派修道院オッテルベルク。シュパイアーの南、王宮都市ハーゲナウ近郊のエルザス北部では、シトー派修道院ノイブルクとケーニヒスブリュック。シュパイアー対岸のネッカー川がライン川に注ぎこむ地点には、シトー修道院シェーナウ。この帝国の中枢地域を補強したのは、北方における、ライン対岸にあるラインガウのシトー修道院エーベルバッハを擁する、オッペンハイムとインゲルハイムの拠点であり、更にはシトー派修道院アルンスブルクを擁するヴェテラウの王宮諸都市フランクフルト、ゲルンハウゼン、フリートベルク、ヴェッツラーであった。中枢地域は東方マイン・フランケン、ヴェルツブルク、バンベルク、ニュルンベルクに向けても拡張し、主としてシトー派修道院ブロンバッハ、エブラッハ、ハイルスブロンがそれぞれに付随することとなった。これら古典的な王領地の他に、シュタウフェル帝国の大きな拠点 (*terrae imperii*) はあと三箇所挙げられる。即ち、1) シトー

修道院ヴァルケンリートを伴うゴスラー周辺のハルツ山地前面の丘陵地帯、2) 東方の前哨として新たに開拓され、王宮都市エーゲルとシトー派修道院ヴァルトザッセンを含むエーゲルラント、3) ヴェルフェン家の遺産から転がり込んだ、ボーデン湖畔の諸拠点とシトー修道院ザーレムを伴う上シュヴァーベンである。

空間的に区分された中核拠点を形成し確かなものにするというこのような試みは、将来の王の支配にとって信頼のおける基盤を提供するべきものであったが、ここでは、シトー派修道院にどのような役割が、帝国政策との関連において割り当てられていたのかを理解していただくために、簡単に示唆するにとどめておく。シュタウフェル家と教皇庁との絶え間ない争いの故、シトー修道会のこのような機能は一時的に認められるに過ぎない。シトー修道会の教皇陣営への移行にもかかわらず、皇帝フリードリヒ 2 世は依然として自らをシトー修道会の修道服で埋葬させたのであった。

ここでカール・フォン・デア・ザルツガッセに戻るが、伝記によるとカールは、自分の生きた時代のすべてのシュタウフェルの支配者たちと信頼に満ちたそして個人的色合いの濃いつき合いをしたのであった。彼が政治絡みの財政取引において示した能力を、活躍したすべての修道院の家政においても発揮したことは、とりわけ印象深い。彼が手をつけたことはすべて黄金となったのである。小修道院長としてのハイステルバッハでのインテルメッツォを経て、カールは、1197 年から 1209 年までプラバントのヴィレールで大修道院長の地位にあった。そこで彼が見出したのは、藁葺きで見ると哀れな何軒かの家屋や小屋であったが、それらは彼の主導のもとに間もなく、修道士や助修士のための広々とした石造りの寄宿舎並びに経済活動のための施設や繁栄するグランギアに姿を変えた。「それでも彼は、神の援助のおかげで修道院を重い負債から守り、他の教会にはその在職中におよそ 600 マルクもの資金を供与した」のであった。

カールが好感のもてる人物であり土地の貴族と良好な関係を築いたことが、修道院に更に豊富な寄進をもたらした。彼自身、ヴィレール大修道院長の地位を退きお気に入りの出身修道院ヒンメロートへ戻ってよいという修道会総会の特別許可を獲得した後、新たな「緊急の知らせ」を受け取った。経営不振に陥ったアーヘン／マーストリヒト近郊にある聖アガタ／ホクト（後のゴッテスタール／ヴァル・デュ）修道院を財政的に立て直すというもので、無論それをカールは短期間で成し遂げた。

カール・フォン・デア・ザルツガッセは、自身の伝記に描かれた事柄が示しているように、間違いなく特別のカリスマ性と高い経済的能力をもった人物であり、注目に値する政治構想をももっていた。指導的な地位にある騎士そして商人でもある家系に属しながら、シトー修道会に加入したケルンの市民グループの代表としてカールは、教育と経験を通して、経済的能力及び修道会にとって非常に好都合であった個人的つながりを存分に利用したのであった。

だが他方でカールは、シトー修道会にとって単に運がよかった事例だということではない。

幸運とは、それを求めつかむ者のところにのみ転がり込むものである。別の言葉で言うならば、修道会が長い間そういった能力のために開かれていて、その資質をもった人々に活動の場を提供したことが、このことが、カール・フォン・デア・ザルツガッセがシトー修道会で、あのような出世を遂げることができた唯一の理由である。

合理的な経済運営や綿密な文書による会計報告のための基盤は、すでに遅くとも 1152 年には、修道会総会のそれに相当する決議を通して整えられていた。「いつどの大修道院長に管理責任者は決算書を提出するのか」(“Quando vel quibus [abbatibus] maior cellerarius computare debet”) という表題の問いに反映されているように、それぞれのシトー派修道院における個々の経営単位の管理者たち (cellerarii) は定期的に決算書の作成を義務付けられ、それを管理責任者 maior cellerarius が大修道院長に対して毎月提出することになっていた。修道院の簿記と会計報告は、1202 年の規定集の中で当然のことながら助修士たちによって必要とされていたように、シトー修道会ではすでに内部からも要請されていた。このことが個々にどのような様相であったのかは、あのシトー派修道院エーベルバッハの有名な文書『オクルス・メモリエ』(Oculus memorie: ラインガウのシトー派修道院エーベルバッハに関する、中世時代の史料集につけられた題名) にみることができる。それは 1211 年におそらく修道士で公証人でもあったベルンヘルムによって作成されたものである。資産目録、寄進帳、土地台帳がここでは修道院の年代記と一緒にひとまとめに綴じられていた。経済的諸経過の厳密な把握と清算についての最も詳細な規定は、ノルマンディーにあるサヴィニー修道院のいわゆる経済規則が伝えている。それは 1230 年にあの有名な大修道院長シュテファヌス・レクシントンによって作成されたものである。その限りでシトー修道会は、与える側であると同時に受け取る側でもあった。修道士あるいは助修士として修道会に入ってきた市民たちの経験を通して、多様な方法で利益を上げていたのであり、またその近代的な経済運営・会計でもって、諸都市を多方面で刺激したのであった。

これまでの考察の中で視野に入っただけでこなかったものに、何度も言及された助修士 (平修士) がある。彼らはたびたび高度な専門家、エキスパートとして、農村のグランギアだけでなく都市居館においても経済上の権限をもち、修道院の対外活動では仲介役を担った。その限りでカール・フォン・デア・ザルツガッセは、修道士、小修道院長、大修道院長として、その経済的役割ということにおいては例外的存在であった。しかし政治的次元を考慮に入れた場合、必ずしもそうとは言えない。国王や諸侯との交渉は助修士では行えず、誰もが認める大修道院長のみが適切に行うことができるからである。

## 5 専門家としての助修士 — 製塩業と鉱山業の事例

この結びの章は意識的に短くまとめることにしたいし、そうすることができるであろう。というのもラインハルト・シュナイダー、ミヒヤエル・テップアー、更にはオットー・フォルク、ヴァインフリート・シッヒラの近業から、平修士の制度と機能の問題や特に初期の頃の

シトー修道会助修士による製塩業と鉱山業の問題について、幅広く情報を得ることができるからである。しかしこれらの問題は、助修士についての完全な理解ではないが、ある程度の完全性を与えるためにいま一度必要なことである。助修士たちは、確かに修道院で生活する際の基本原則（服従、清貧、貞潔）を義務付けられていたが、修道士たちに対して下位の地位にあり、彼らとは別の独自の規則に従って生活した。修道士たちがより一層祈りと黙想の義務に専念したのに対し、助修士たちはそれとは別のより高度な仕事をこなさなくてはならなかった。彼らは通常比較的身分の低い生まれで、修道士とは異なり、無学で少なくとも神学教育は受けていなかったが、特別な能力をもち、工業・手工業技能や組織的に商業を営むうえでの知識に習熟していた。そのことはすでに様々な形で示され、シトー修道会の経済的成功にとって、また他ならぬ市民層との関係においても重要なこととして描かれてきた。したがって助修士が最も精力的に活躍した 12・13 世紀に、シトー修道会の経済的發展もその最盛期を迎えるということは、決して偶然ではないであろう。

助修士の意義はとりわけ塩の供給——ほとんどのシトー派修道院にとって重要な問題であった——において明確となり、したがって、初期修道会時代のシトー修道会にみられた、塩に関する事柄についてのある種の動きを語ることができる。ドイツ語を話す地域にあるおよそ 100 のシトー派修道院のうち約半数が、中世の時代に塩の生産・販売に関与していたことが証明される。このことに関してその活動が抜きんでていたのはアルプスの東部地域のみであり、そこで彼らは塩生産の重要な部分を担っていた。アウス湖に独自の大きな製塩工場をもっていたライン修道院や、より一層印象深いのは、ハラインとライヒェンハルにある修道院ザレムとライテンハスラッハであった。そこでは助修士たちが、製塩工場の管理者として活動していたことは明らかであり、またそれは革新的なものであった。地中や山中にある塩を、水を流し込むことで溶かし出すという技術の導入により、食塩水の人工的生産を可能にし、またそのことでようやくハラインの岩塩鉱床の開発を完了させたのであった。ヴェストファーレンや中部山岳地帯の周縁といった他の地域では、ほとんどのシトー修道院が塩の生産に参与し、余剰分は利益が出るよう取引にもちこむか、あるいはまたロイプス修道院のように、シュレージエン地方向けに塩を独占的に供給する組織のようなものを構築したのであった。すべての製塩工場のうち最も重要なのはリュエネブルクであり、そこに 11 のシトー修道院が関与していたが、すでに 13 世紀から 14 世紀への変り目の頃から収益の獲得のみを目指すようになっていた。このことは、白い修道士たちの経済政策と利害関心に変化を認めさせるものである。その一方で大きな製塩工場は、以前からすでに世俗の、即ち市民または領邦諸侯の管轄下へ移行していた。このようなことがあったにしても、シトー修道会が初期の段階で、資本の投入と工場の譲り受けを通しての大規模な生産増加と広範囲に及ぶ塩の取引に、大きく関与していたということには変わりはない。

鉱業・精錬業は 12 世紀に予想外の隆盛を極めたのであったが、そこでは若干のシトー派修道院が革新的で注目に値するような役割を果たしていた。中でも南ハルツ周縁にあるヴァ

ルケンリート修道院はその筆頭に挙げられる。ロートリンゲンのシトー修道院出身の修道士と助修士は、すでに早くからモリumontあるいはブルグントのクレルヴォーといったところで鉱山業の経験を積んでいたが、その経験を専門家を通してヴァルケンリートへ伝えたのかどうか、あるいはどの程度それが行われていたのかについては、結局のところ推測の域を出ないとは言うものの、そうであった可能性は高い。

いずれにしてもヴァルケンリートは、ハルツまたはそれを越えたところでも、鉱業・精錬業において卓越した決定的意義をもつに至ったのであり、間もなく組織や技術においても明らかな優位を獲得した。それは鉱山業における排水設備であったり、また特にグランギア・イメデスハウゼンの領域における数多くの溶解・精錬設備へのエネルギー供給であったりした。イメデスハウゼンでは、そこで採掘されたか、あるいはルメルスベルク鉱山（ゴスラー）から運ばれた鉱石が精錬され、部分的に加工されていた。そのような水やエネルギーを処理する技術のほとんどを、今日でもなお、ハルツにある古くからの鉱区でみることができる（パンデルバッハの流域）。ヴァルケンリートはそのグランギア・イメデスハウゼンとともに、ハルツの鉱山業そのものにとって、また遠くライン・マース地域やリュベックを越えてバルト海にまで及んだ鉱石取引の自立的組織においても、金属工業地帯の中心であり続けた。その金属工業地帯にはゴスラー、ブラウンシュヴァイク、ヒルデスハイムといったところが含まれた。更にこのシトー修道院は、その特殊な知識をその娘修道院にも伝授した。このことはまずアイスレーベン南にあるジティヒェンバッハに当てはまる。そこでは遅くとも1190年以降ヴァルケンリート出身の修道士と助修士の支援を受けて、銅鉱が採掘され精錬された。またアルトツェレ修道院では13世紀に、急速に拡大していたフライベルクの鉱山業に関わるようになり、その娘修道院ロイプス設立を経てシュレーゲンにまで影響を及ぼしていた。

総括するならば、シトー修道会の衝動的ともいえる様々な活動は、経済の活性化と、特に初期の時代には都市化の進行や都市の成長過程に貢献することとなったのである。しかし、早くも13世紀が経過する中で白い修道士たちは、経済や都市の発展を、もはや必ずしも積極的に推進する者ではなく、単にそれに同調する者となっていた。単純化して言うならば、以前に獲得した地位を確固たるものにするか固定収入を確実に受け取るかに終始するようになったのであるが、その現象が、13世紀から14世紀への変わり目以降ではなく、すでにその前の段階においてみられたのである。修道院が内的に変化を遂げたこと、そして市民層の自立化が進んだことと並行して、13世紀最初の三分の一かあるいは半ば以降、都市内にはシトー修道会にとって新たな競争相手が登場した。即ち托鉢修道会であり、そこに市民層からのより一層強い共感と多くの寄進が集まるようになった。

## 参考文献

### 修道院文書

- R. Hanslik (Hg.), *Benedicti Regula* (= Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum 75), Wien<sup>2</sup> 1977.
- J. de la Croix Bouton u. J.B. van Damme (H99.), *Les plus anciens textes de Cîteaux*, Acheln 1974.
- B. Lucet (Hg.), *La codification cistercienne de 1202 et son évolution ulterieure* (= Bibliotheca Cisterciensis 2), Rom 1964.
- B. Lucet (Hg.), *Les codifications cisterciennes de 1237 et de 1257* (= Sources d'histoire médiévale 9), Paris 1977.
- J.-M. Canivez (Hg.), *Statuta Capitulum Generalium Ordinis Cisterciensis ab anno 1116 ad annum 1786*, Bd. 1-8 (= Bibliothèque de la Revue d'Histoire Ecclésiastique 9-14 B), Löwen 1933-1941.
- J. Strange (Hg.), *Caesarii Heisterbacensis monachi ordinis Cisterciensis Dialogus miraculorum*, Köln 1951. – Vgl. A. Hilka (Hg.), *Die Wundergeschichten des Caesarius von Heisterbach*, Bd. 1, 1933.
- J. S. Brewer (Hg.), *Giraldus Cambrensis, Speculum Ecclesiae* (= Rolls Series 21,4), London 1873.
- M. R. James (Hg. u. Übers.), *Walter Map, De nugis curialium. Courtriers Trifles* (= Oxford Medieval Texts), Oxford 1983.
- J. Leclercq u. H. M. Rochais e.a. (Hgg.), *Sancti Bernardi Opera*, Bd. I-VIII, Rom 1957-1977.

### その他の関連論文

- Kaspar Elm, Die Stellung des Zisterzienserordens in der Geschichte des Ordenswesens, in: *Die Zisterzienser* 1, S.31-40.
- Eva Gießler-Wirsig, Die Beziehungen mittel- und niederrheinischer Zisterzienserklöster zur Stadt Köln bis zur Mitte des 13. Jahrhunderts. Ein Beitrag zur Verkehrsgeschichte, in: *Zisterzienser-Studien* IV, S.61-132.
- Hermann-Josef Hüsgen, *Zisterzienserinnen in Köln* (= Bonner Beiträge zur Kirchengeschichte 19), Köln, Weimar, Wien 1993.
- Dietrich Kurze, Die Bedeutung der Arbeit im zisterziensischen Denken, in: *Die Zisterzienser* 1, S.179-202.
- Louis J. Leikai, *The Cistercians. Ideals and Reality*, Kent (Ohio) 1997.
- Jürgen Miethke, Die Anfänge des Zisterzienserordens, in: *Die Zisterzienser* 1, S.41-46.
- Christian Mossig, *Grundbesitz und Güterbewirtschaftung des Klosters Eberbach im Rheingau 1136-1250* (= Quellen u. Forschungen zur hessischen Geschichte 36), Darmstadt, Marburg 1978.
- Anja Ostrowitzki, *Die Ausbreitung der Zisterzienserinnen im Erzbistum Köln* (= Rheinisches Archiv 131), Köln, Weimar, Wien 1993.
- Winfried Schich, Die Wirtschaftstätigkeit der Zisterzienser im Mittelalter: Handel und Gewerbe, in: *Die Zisterzienser* 1, S.217-236.
- Winfried Schich, Die Stadthöfe der fränkischen Zisterzienserklöster in Würzburg. Von den Anfängen bis

- zum 14. Jahrhundert, in: *Zisterzienser-Studien III*, S.45-94.
- Winfried Schich, Zur Rolle des Handels in der Wirtschaft der Zisterzienserklöster nord-östlichen Mitteleuropa während der zweiten Hälfte des 12. und der ersten Hälfte des 13. Jahrhunderts, in: *Zisterzienser-Studien IV*, S.133-168.
- Winfried Schich, Salzproduktion und Salzhandel mitteleuropäischer Klöster im frühen und hohen Mittelalter. Von Marsal bis Wieliezka, in: *Salz - Arbeit - Technik. Produktion und Distribution im Mittelalter u. Früher Neuzeit*, hg. v. Christian Lamschus, Lüneburg 1989, S.136-162.
- Winfried Schich, Der Handel der rheinischen Zisterzienserklöster und die Einrichtung der Stadthöfe im 12. und 13. Jahrhundert, in: *Die niederrheinischen Zisterzienser im späten Mittelalter. Reformbemühungen, Wirtschaft und Kultur*, hg. von Raymund Kottje (= Zisterzienser im Rheinland 3), Köln 1992, S.49-73.
- Winfried Schich, Das schlesische Kloster Leubus und die Gründung von Müncheberg und Münchehofe an der Westgrenze des Landes Lebus im zweiten Viertel des 13. Jahrhunderts, in: *Vita Religiosa im Mittelalter*. Festschrift für Kaspar Elm (Berliner Historische Studien 31 = Ordensstudien XIII), Berlin 1999, S.193-216.
- Reinhard Schneider, Stadthöfe der Zisterzienser: Zu ihrer Funktion und Bedeutung, in: *Zisterzienser-Studien IV*, S.11-28.
- Reinhard Schneider, *Vom Klosterhaushalt zum Stadt- und Staatshaushalt. Der zisterziensische Beitrag* (= Monographien z. Gesch. des Mittelalters 38), Stuttgart 1994.
- Klaus Schreiner, Zisterziensisches Mönchtum und soziale Umwelt. Wirtschaftlicher und sozialer Strukturwandel in hoch- und spätmittelalterlichen Zisterzienserkonventen, in: *Die Zisterzienser 2*, S.79-135.
- Knut Schulz, Fernhandel und Zollpolitik großer rheinischer Zisterzen, in: *Zisterzienser-Studien IV*, S.29-59.
- Knut Schulz, Die Rolle der Zisterzienser in der staufischen Reichspolitik, in: *Die Zisterzienser 2*, S.165-193.
- Knut Schulz, Reichspolitik, rheinische Zisterzen und Kölner Führungsschicht. Kreditgeschäfte und persönliche Verknüpfungen im ausgehenden 12. Jahrhundert, in: *Hochfinanz im Westen des Reiches 1150-1500*, hg. von F. Burgard, A. Haverkamp, F. Irsigler u. W. Reichert (= Trierer Histor. Forschungen 31), Trier 1996, S.121-136.
- Gerd Steinwascher, *Die Zisterzienser-Stadthöfe in Köln*, Bergisch Gladbach 1981.
- Michael Toepfer, *Die Konversen der Zisterzienser. Untersuchung über ihren Beitrag zur mittelalterlichen Blüte des Ordens* (= Berliner Historische Studien 10 – Ordensstudien IV), Berlin 1983.
- Otto Volk, *Salzproduktion und Salzhandel mittelalterlicher Zisterzienserklöster* (= Vorträge u. Forschungen, Sonderband 30), Sigmaringen 1984.
- Klaus Wollenberg, Wein und Salz bei den Zisterziensern, in: *Vita Religiosa im Mittelalter*. Festschrift für Kaspar Elm (Berliner Historische Studien 31 = Ordensstudien XIII), Berlin 1999, S.227-248.
- Die Zisterzienser. Ordensleben zwischen Ideal und Wirklichkeit*, hg. von K. Elm, P. Joerißen, H. J. Roth. Bd.1: Ausstellungskatalog, Bonn, 1980, Bd.2: Ergänzungsband, Köln 1982.
- Zisterzienser-Studien I-IV* (= Studien zur europäischen Geschichte XI-XIV), Berlin 1975-1979.